名古屋藩における薬用人参の栽培について

安江政一

宝暦六年発行の広参品によると、尾張国で栽培されている薬用人参は三枝五葉赤実直根であると観察し、薬舗に売られている生薬は他国の産物より品質がよいという。藩医柴田正簡の著、『日用薬品考』は文化八年に出版され、市中に出廻っている尾州産人参は日光産のものに勝るとのべている。ここにいう尾州産は藩所属の薬園または医師による少量の製品が、高価の故に薬店に流出したものと思われる。その故は宝暦十三年に藩の行った人参の大規模栽培が失敗に終っているからである。この経過は『東谷御林人参一巻』に詳しい。寛政二年幕府は公儀薬園からの唐蛮薬植物の民間流出の禁を解き、薬用植物の栽培と売買を自由にした。この後、名古屋藩領の木曽御嶽山麓地帯において農民による人参栽培が成功したことは長野県西筑摩郡誌と尾州御薬園人参栽培一件綴などから知ることができる。

杏雨書屋には右の一件綴と人参繁茂数改帳なる尾州薬園関係の二文書がある。後者は何藩のどの地方のものか書いてないが、列挙してある人名とその順序および人参実の数が一件綴中の一文書と一致するから、人参実配給の後四年たって調査した成績表であって一件綴関連文書であることがわかった。一件綴の作者は美濃国恵那郡付知村庄屋田口忠左衛門慶郷とその子慶成の二人である。木曽谷における人参栽培が成功して農民の収入になっていることを知り、これを付知村等への導入をはかり、成功するまでに提出した願書の控、受領文書、覚書、書簡等を弘化四年から嘉永六年まで日付順にまとめたものである。この綴の最初の文書は人参栽培の許可願であって木曽谷の黒沢、荻原両村における成功の過程から書きだしているが、西筑摩郡誌と比べて一致し信用性が高い。飯嶌清兵衛の苗字帯刀御免のような伝え聞きも混入しているので注意は要するが、矛盾は極めて少ない。

慶郷の祖父は大阪で人参の種を手に入れ、これを付知で栽培し、出願のとき六、七本の人参草をもっていた。人参

は実がなってもこれを蒔いて植えついでゆくことさえ困難であったが、田口家ではすでに人参見本を維持する経験を積んでいたのである。それでもなお出願に当っては試しまき、まき捨てなどのような収穫の責任を負わない実験を行う許可を得、その上で村民からの栽培希望者を募っている。栽培開始に当っての非常に慎重な態度がうかがえる。と同時に役人の支配力が幕末に近づいて大幅に後退していたこともわかる。

田口家には人参作立方尋日記がある。半紙八枚。慶成が木曽谷の村々へ人参栽培法の調査旅行をした記録で、栽培法の要点と旅行の経路が書いてある。これによると栽培技術に関しては黒沢の武居庫介が詳しかったと思われる。一件綴の書簡類によると藩役所との交渉、相場の変動、製法などについては荻原村の飯嶌清兵衛に相談したと思われる。

名古屋藩領付知から苗木藩領越原（おっぱら）と神土（かんど）の両村へ無断で人参実を横流しして、藩境を越えて人参栽培が浸透していた。名古屋藩では弘化四年人参栽培を藩営にして自由な取扱いを禁じていたが、苗木藩では幕命のまま自由であった。横流しを知った薬園手代は藩境において抜荷問題になるのを恐れ、苗木藩においても薬園制度を設け、名ばかりでもよいから作人を薬園掛りにしてもらうよう助言して解決した。この境界をねらったか否かわからないが、付知と越原、藩境をはさむ両村において大量の収穫直前の人参が盗み掘られる事件が起こった。特殊な物件であるから直ちに名古屋の薬園役所に届けて薬舗に手配し、兼山、中津川などに人を遣して生人参を干す者を探して、兼山で盗品を買った商人を見つけ、売人の服装人相などから犯人を割り出した。迅速巧妙な広域捜査であった。

松平君山の大規模な栽培と一件綴の場合を比べると人的組織に大差がある。君山の場合最高指揮者は儒学者君山で、藩医も薬園掛りも含まれず、実地担当者は入尾土着の御林方役人の兼務で、農民も参加していなかった。今回の最高指揮者は事実上藩医浅井董太郎であり、その手代の薬園掛りがしばしば廻村していた。村では庄屋と栽培の熟練者が人参植付栽許役の肩書で農民の世話をした。人参実は数千から数百、少ない者は五十粒位に細分して能力に応じて割あて担当させた。研究成果を農民の間に普及させる一

つの組織をあみだしていたことが早急な栽培成功の原因であったと思われる。

（瀬戸市）

ヒポクラテスの木と体験学習

寺畑喜朔

医学教育の中で「医学概論」のあり方について、医学教育者間で十分な検討を行ったという実績はない。

全国七九大学のうち、医学概論を教科として採用しているのは五四大学、うちカリキュラムとして単位、授業時数等を明記しているのは三六大学である。また七九大学のうち、医史学を教科として正規に組入れているのは、六大学にすぎない。

演者は昭和五十四年以来、医学概論を担当している。授業期間は第一学年の一年間で、毎週一回九十分間、三十コマである。講義は、医学史を中心として過去、現代、未来に及ぶ医学医療の発達を基盤として、基礎医学、臨床医学の入門を説くとともに、医の倫理について認識させるよう努めている。しかし、学生達は医学概論について、どれほど関心を示したか、その客観的成果をうることは容易では